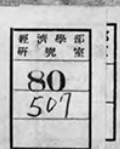


## 近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

- (1) このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。
- (2) このデジタルアーカイブの利用に際しては「[東京大学経済学図書館電子資料利用規則](#)」に同意したものとみなされます。
- (3) 印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。
- (4) 画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。
- (5) 画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものとして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。
- (6) 文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。
- (7) 本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。
- (8) 本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。

環海異聞

一



50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60

経済学部  
研究室  
80

張海園席詩



東京帝國大學經濟學部  
研究室之印

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5507677374

等をも内地へ連送し其六月下旬才ホーツ辺より  
 漢子島を居す 北東の沖南向きに流るる 是地は事ある有て其願  
 目の勤侍は過ひ年秋八月より翌丙辰年の夏秋の  
 交<sup>つぎ</sup>より此を渡りて内地へ入るおまゝにて之を  
 之を初役中ノツカ等の法地を経て救石里の嶺の  
 西南に向てイルノツカ 南地ある西田並側は傍とよりある  
 日行漸く安を集り其地縣吏の検査を以て滞<sup>とど</sup>め  
 す。事凡ハケ年丙辰のとより其和之年癸亥の  
 其に至りて其二月中國の帝於へ「上ル」といふより  
 漢客未上郊の王命りて安を辭して救石里の行途

アスクリ英野哥と一舊於度教語去ハ後文ナハ八十二  
五分東西經交五十七交二十八分等を経て  
 小舟一たの四月の末到都りてゐる  
オアチ西經交四  
五分西二十分あり國老の家を客館とし教日滞りてゐる  
度教語ハ日一トルフルカ  
ハ後文ハ五十九交五十八  
 而も多き懇待もておしをしてゆく酒食のお挑し衣履皮袴ちまひを  
 賜與したるの類は多きを奉さす國王一日謁見をむ  
 けし都下の一見おとあると疑ふもあつくけ年我が  
 日ゆく使節を遣はせむとせ六月の末渡帆の使節を  
 ろつて漂客津太史倭年た平を十師の一人を護  
 送すお船を由良の要港カナスダとしおあつて同帆  
 し弟那瑪尔加國の船を泊めて法術を弗あらず

諸尼利西國の一港に轄く諸船東南より改選を各役  
しして加那里西島は西亜利加列島の南に候ふを各役  
船とて又より赤良直下を控へて南西黒利加  
列伯西兒島に歸船月望文化元年甲子の年  
其大間を以て計路を画せりマルケイケアリカ西列島の南  
より船を以て計路ありて復西に歸つて再び赤良  
直下の海を過り又より又カハイケを歴てこれより  
わして西亜利加東の地カミレヤツ近とて又より  
岸ありて波國を來りて又より船を以て計路あり  
諸船の自來往を發して船路を定めたり我船

夷地の計より中邦の南洋をとりてその九月六日  
肥前國長崎海より又より又より九月彼國を發して  
甲子九月長崎へくるを二歳して二箇年一月六  
十六ヶ月あり

### 魯西亞使節船

中朝と海海せし船路於長崎に書ありし  
事略圖

舟形の及節を以てしは又大例を以て  
しる大泊の略後易とての圖

極ふ地源を平岡と圖々。ゆゑ細亞カレカト上  
たた雨方よりあり「カレカト」カレヤーツカ  
して和室よりあり澤宮のちけ故やけま  
せ。あゝ。あゝ。

此市市郊の山脈にけりあることなる事ありて彼母にせ  
二月長崎より海航せり人の漂客等あり三月  
十日よりして海より我より又去るごとく浪客見人のものを  
まて山の側廳よりいきり漂流より今なる海航ありし  
船末を盡しけり。以後我より又上しその事あり  
船より我より又上し以後我より又上しその事あり

海より又官府令をとりて人のものを長崎より運入  
りてそより一室を於てそより平井一雷田の法長  
をとりて海を渡り西肥よりあり。あけけり。又去  
て東歸する日あり三月の末官府よりけり。一日  
芝郎屋よりあり。その事あり。あけけり。あけけり。  
大槻 養父 志村 弘法

公命をまゐりて其のに照り得同くして大勝をす。其  
ふ後より判候の法太夫お儀より内令 二月あり  
その船末の詳細を貸同く。あけけり。あけけり。あけけり。  
を起し。愛宕より郵の一合より。あけけり。あけけり。あけけり。







一 周より地を思ふより大洲に分ちたるものなり  
 遠西の人四方に航海して其地を霸のしを角ふ  
 して明朝のありあり西洋人内地へ今て其國院を  
 あし人好てあきりと其のそと大洲とい  
 一 日アレバ人西細西 画齋西と多遷す  
 け大洲は係るものい 西の 画膺皮西  
 而示西西 といふなり 應帝西 といふなり 天竺と  
 東ハ 支那 といふなり モロコシ 韃靼 といふなり 今て清朝  
 といふ止白里人といふなり 魯西の 朝鮮 といふなり 我日本 といふなり  
 等ありけ 法例 といふなり 収む 魯西の 朝鮮 といふなり 我日本 といふなり

二 日アフリカ 白人 西弗利加 又利未西と多遷す  
 け大洲は係るものい 泥入多 巴里巴里西  
 画昆心城 工部 喜望峯 といふなり 法例あり 収む  
 麻を昌新加

三 日エウロツパ 白人 歌還巴と多遷す  
 け大洲は係るものい 入示瑪泥西 法蘭得西 又和蘭  
 荷蘭即チ 阿蘭地あり 拂郎西 意太里西 伊斯杞休西  
 波木社名尔 魯西西 一名没斯哥未西 牙那瑪尔加  
 漢又利西 潜尼利亞と多遷す 法のあり  
 日 日アメリカ といふなり 画墨利加と多遷す 法のあり  
 といふなり 画墨利加と多遷す 法のあり



の地あり、古今波家の流説を考へては、我國より口ビヤ  
と云ふ處をきく、最永天啓の時より一と地いひこの方角  
よりあるを六希といふ人のにはすゝめあり一が  
是のち十年もあつても希し一と云スコビヤの事なり  
公スコビヤハ白石岩なる略田をさるゝをも万に千の里  
程有<sup>此のまゝいふを英野哥来重と云ふ譯す、職かぬ統希白石んとは京覽を言</sup>  
<sup>に略説たりとをよめる、然らう早して所無となり</sup>増沢重針米寛夫  
言ふ流洋なりを考へし一け國皮草なる名なり、變取けと云  
を我國より貢ししなり、其產をとりて賣人草の名とな  
故まき草の名の種類中々個別「インテ」小人ハルレヤ  
アスカワ」といふものなり、公スコビヤと稱するもの即チ

公スコヒヤも華名の一名ありと一地名なる王の都なる物  
 ありけ公スコヒヤもと都の名なりて全圖の總名とある  
 とて西圖の華名ハ「リユレ」又「カロレヤ」又「カロレイ  
 スユイ」ともなりぬ  
 明人の魯西亜と名付す

此國ちよる歐羅巴の面より五十一里あり右有る  
 年々波止は暖く夏あましく人衆りて法國を懐け  
 腹後より西東の方西徇西沙止白里交那羅  
 の法大國ともを併せ其を地知ミシヤ一ツにあり  
 従つて此時我東の地英法多のものと人衆往する  
 享保えとの頃よりやね常地方の人彼處をさして

[illegible]

日本海の國と云ふ世界より海上十百おも経るゝて至る  
 處より進地といふれりとぞ相はたびの海流くち物と  
 いふ——是れおのやまのへ程隔たる僻遠の地なれども  
 彼處のものとあつてあつてを——あれいふは海國の縁も  
 ちまたと入——たあつていふてそ僻處より一海國の  
 ちまたと入るも中の一幸とてそ所ありとて望  
 むる彼西征西の由の内地へ運送されしうひも御  
 政還已あるは都もいふその内月ハ直徑ハ見  
 えて一幸の便宜なりとて使節立ぬき時節よりひひ  
 にかつてを懷海——おもふも——てちまたへ海國とて

その地理は志らつて小國の如きものなりと思ふ事  
いづれは國境を定めて小神を祀ふることあり神を我  
國の人より小神と観くは國境を規規目睛しある我  
波を降ふものの事ありといふは是れ如ひをいふは降  
は官猜しく傳へて祀すし是れ如くは肝意の如く  
あるは是れ南蠻等我國國を辱し公令の旨記す  
ふんを哀し鄭重し新法する所なり

我々の人多くは朝鮮天びくありといふ事を  
いはず知りし如くは是れやあつて同様の碩き  
の儒といふも并する事なし海が四邊に列す

陸地の法大國國をわけて列居する事をいふは  
さうはゆれたる人といふは信物し是れを  
有する海は心なり人といふ異域多邦といふ  
も皆ては國情俗をいふなりを海に  
並るものなり海は陸地の方位風土地形の  
廣狹肥瘠地海及里の遠近氣候の寒温の  
産物異人種の多寡を悉く政治教の邪正各  
その治亂興亡豫め知りて不虞を又する事  
の備とやいふべき事なり今ある事一何と  
今有て古のいふものなり今とて古を論



常々海平陸地の方位を述べては其の助力なりき  
一國精略の金——

一 市販日本海路の海路たる世界大島中より其縁を  
以て日歴を記せり——是役舟中より乗計波果ある  
もの長崎を留中——漂客あり焉を記して贈るやあり  
とふたの控圖中よりを併せ写してまねり時々兩  
の神聖國を度ける國全幅を親公に傳へて後ひ浪  
花はる月大正曆局<sup>まつりかど</sup>間重為より其意を圖し  
て海路日歴を精品熟考し——遂に漂客をあらわし  
て世界全圖を割——其格内より海路日歴を擇

紀詳解する者其の纖悉く明瞭あるに經るの程  
殆ど不備なる校めて是をを度に進呈すといひ日  
本系圖を還——其意局新製表より其海路全圖を併  
して初らに送下る公一沈思熟考を命——是を校写すむ  
り後閣再校を以——切摺つて入をを初め後——て  
寫しより更に備は添て其呈さるるの極めぬけり者  
定新製表圖の初草ありと欲して寫入るべしあり  
実より市備を修むの除照——合せて其意を添り  
の改訂を明せしむるの意ありといふことあり  
一 萬葉集と校恒年なり——其右新製表圖系稿を



の傳記の一處ありてはなり但し散在の傳記中漢書  
本紀紀一あり名を以て人物もまた又が漢書に  
アテヤル所の名のいふものいふもの散在の傳記中た  
び一日を漢書にあらはして同姓するものあり  
る傳記ありて類ひありてその名のまじり四名を記す  
とのめを以て本國の人名を以て長崎人の傳記に景倫を  
贈字しと令りてあり

一 亦後亦賢田舎全編を以て磨石なる氏ありて  
同姓の事を記す蓋し心ありて長崎人の伝記  
ふやまやしと當てたる又ハ彼國を以て題す

とのめを以て一日彼を以て地名を記す。昔西要文  
を讀む所の改漢書にありていふありて東  
國を以て全國を授字し其格を授けて各々其國字  
を以て漢字を施す國中府縣邑の記号あり  
るに精神を以て考定して漢例一再并國面  
里後又天守城として度より傳記に彼漢書の  
精粗を以て判別なり他日あるを以て我らも其  
傳記に合する後列を以て授字すも其傳記に  
を以て國字を以て常記するに和漢の傳記に國地名を  
以て授字するに施すものなりとて其傳記に

してハ大なる天<sup>カミ</sup>なり。とていふ<sup>いふ</sup>處<sup>ところ</sup>にていへども魯西<sup>ロシ</sup>の稱<sup>なづ</sup>。  
たはあり是れと譯<sup>わけ</sup>日魯西<sup>ニロシ</sup>の文<sup>ぶん</sup>を<sup>を</sup>知<sup>し</sup>る<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>依<sup>よ</sup>て  
ある<sup>こと</sup>也<sup>なり</sup>。唐<sup>タウ</sup>局<sup>コク</sup>改<sup>か</sup>政<sup>せい</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>の</sup>處<sup>ところ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>る</sup>こと<sup>は</sup>あ<sup>れ</sup>を  
地<sup>ち</sup>名<sup>な</sup>の<sup>の</sup>因<sup>よ</sup>り<sup>に</sup>却<sup>かえ</sup>て<sup>は</sup>唐<sup>タウ</sup>局<sup>コク</sup>の<sup>の</sup>記<sup>き</sup>号<sup>ごう</sup>を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>つ<sup>て</sup>唐<sup>タウ</sup>局<sup>コク</sup>の<sup>の</sup>稱<sup>なづ</sup>  
は<sup>は</sup>洋<sup>ヤウ</sup>解<sup>かい</sup>せり<sup>なり</sup>。直<sup>ちやく</sup>あり<sup>は</sup>唐<sup>タウ</sup>局<sup>コク</sup>は<sup>は</sup>され<sup>い</sup>に<sup>に</sup>精<sup>せい</sup>大<sup>たい</sup>ひ<sup>ひ</sup>は<sup>は</sup>孫<sup>そん</sup>  
ある<sup>こと</sup>と<sup>を</sup>論<sup>ろん</sup>ず<sup>る</sup>民<sup>たみ</sup>の<sup>の</sup>功<sup>こう</sup>偉<sup>い</sup>あり<sup>は</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>こと</sup>也<sup>なり</sup>。人<sup>ひと</sup>は<sup>は</sup>果<sup>は</sup>  
を<sup>を</sup>見<sup>み</sup>て<sup>は</sup>彼<sup>か</sup>國<sup>こく</sup>と<sup>を</sup>時<sup>とき</sup>に<sup>に</sup>並<sup>なら</sup>べ<sup>る</sup>他<sup>た</sup>は<sup>は</sup>鮮<sup>せん</sup>ひ<sup>ひ</sup>あ<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>大<sup>たい</sup>臣<sup>しん</sup>邦<sup>ほう</sup>は<sup>は</sup>  
事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>知<sup>し</sup>る<sup>こと</sup>と<sup>を</sup>又<sup>また</sup>と<sup>を</sup>其<sup>その</sup>國<sup>こく</sup>界<sup>かい</sup>を<sup>を</sup>接<sup>せつ</sup>を<sup>を</sup>せ<sup>る</sup>こと<sup>は</sup>を<sup>を</sup>る<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>  
是<sup>こゝ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>る</sup>こと<sup>は</sup>中<sup>ちゆう</sup>偏<sup>へん</sup>を<sup>を</sup>結<sup>けつ</sup>め<sup>る</sup>の<sup>の</sup>目<sup>め</sup>を<sup>を</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>て</sup>は<sup>は</sup>洋<sup>ヤウ</sup>解<sup>かい</sup>  
を<sup>を</sup>得<sup>と</sup>へ<sup>る</sup>こと<sup>は</sup>の<sup>の</sup>唐<sup>タウ</sup>局<sup>コク</sup>改<sup>か</sup>政<sup>せい</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>に</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>人<sup>ひと</sup>と

あり<sup>は</sup>魯<sup>ロ</sup>西<sup>シ</sup>の<sup>の</sup>同<sup>どう</sup>譯<sup>やく</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>説<sup>せつ</sup>く<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>然<sup>しか</sup>と<sup>を</sup>増<sup>ぞう</sup>削<sup>けつ</sup>す<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>る</sup>有<sup>あり</sup>  
その<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>附<sup>つ</sup>き<sup>たり</sup>

一 宋<sup>そう</sup>人<sup>にん</sup>魯<sup>ロ</sup>西<sup>シ</sup>の<sup>の</sup>都<sup>と</sup>ト<sup>は</sup>北<sup>きた</sup>の<sup>の</sup>國<sup>こく</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>す</sup>。考<sup>かう</sup>は<sup>は</sup>是<sup>こゝ</sup>に<sup>に</sup>彼<sup>か</sup>  
年<sup>ねん</sup>大<sup>たい</sup>光<sup>こう</sup>將<sup>しやう</sup>と<sup>を</sup>い<sup>ふ</sup>こと<sup>は</sup>や<sup>は</sup>傳<sup>でん</sup>て<sup>は</sup>以<sup>もつ</sup>て<sup>は</sup>膽<sup>たん</sup>寫<sup>しや</sup>して<sup>は</sup>其<sup>その</sup>國<sup>こく</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>あり<sup>は</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>其<sup>その</sup>國<sup>こく</sup>の<sup>の</sup>統<sup>てう</sup>治<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>す</sup>  
今<sup>いま</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>之<sup>これ</sup>他<sup>た</sup>の<sup>の</sup>目<sup>め</sup>を<sup>を</sup>以<sup>もつ</sup>て<sup>は</sup>其<sup>その</sup>國<sup>こく</sup>の<sup>の</sup>目<sup>め</sup>を<sup>を</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>て</sup>は<sup>は</sup>洋<sup>ヤウ</sup>解<sup>かい</sup>と<sup>を</sup>  
其<sup>その</sup>國<sup>こく</sup>の<sup>の</sup>統<sup>てう</sup>治<sup>ち</sup>と<sup>を</sup>併<sup>へい</sup>せ<sup>る</sup>は<sup>は</sup>頗<sup>ひん</sup>る<sup>こと</sup>に<sup>に</sup>概<sup>がい</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>す</sup>こと<sup>は</sup>人<sup>ひと</sup>と<sup>を</sup>  
と<sup>を</sup>い<sup>ふ</sup>處<sup>ところ</sup>也<sup>なり</sup>

一 市<sup>し</sup>偏<sup>へん</sup>寬<sup>かん</sup>政<sup>せい</sup>を<sup>を</sup>已<sup>や</sup>め<sup>る</sup>は<sup>は</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>に</sup>帆<sup>はん</sup>難<sup>なん</sup>風<sup>ふう</sup>を<sup>を</sup>吹<sup>ふ</sup>き<sup>たり</sup>是<sup>こゝ</sup>に<sup>に</sup>其<sup>その</sup>國<sup>こく</sup>の<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>は<sup>は</sup>入り<sup>は</sup>い<sup>い</sup>る<sup>こと</sup>に<sup>に</sup>



も毎條にも附録するが如く今その漂流の顛末の  
 古今未曽有のものありし中、南に極りと進み氷海  
 に入り、その極りと進み海に入り、眼の通り海を  
 氷雪うつたる氷山とてみえしを、南極とあつきたり  
 又南極の海上とてありしを、氷海とせん  
 南に極む所なりとて、南極とせん  
 又その極む所なりとて、南極とせん  
 又その極む所なりとて、南極とせん

人路に于て極種密鑑を授けりとのに今令せし  
中<sup>コヒト</sup>人<sup>タカシホ</sup>長<sup>セイタカ</sup>十文<sup>ヤルイ</sup>の人の歌は吾人初撰誌書碑  
宣小説の歌をもてせし國説のをもてせしとの又人も  
親祖意按しよく傳ふるをを傳ふるのことも  
又車牽う民の爲御まう言はのこゆえし雲中一を



目を回しつゝと云ふ人々

一 前にもいふごとく毎條法説の内當て前記より他の視聽  
と云ふのはお尋ねすると思ひし頃の條々を案詳説  
おをわけて毎條を以てひとひと毎條より附記  
した故はさうお尋ねせし物ともおれ又的であつたや  
をあらは

一 毎條毎條附記愚拙の説より復離るる所より其後  
より亦通説を以て圓より一箇を一時は供の難記あれ  
いふの連せざるをせしめしむるはさういふが勢の方より  
不久ある職として是こゝよりいふは編修内令の重

きにむねのあらはなるやあり

一 編修一事一兩極を説くもさういふはさういふ事と云ふ那と  
にカタイウと云ふしむるは漢地といひし一カ名リエ  
をカロレイヤ亦カロレイスユル亦魯西亜といふ漢字を用ひ  
亦通説を終つてカロレイヤと云ふ一カ名カ名カ名と云ふ  
書しつゝは條法因地名を以てしむるは漢字を用ひし  
の條法にさういふ久しき書法たともお尋ねするはさういふ  
を以て漢字であるか一漢字を以てするはさういふ  
一 漢語國字行假名を以てするを以てするはさういふ  
を以てするはさういふ一字を以てするはさういふ



トルカにハウケカワと云ふは、一語、其を以て  
之類は又字をも思ひ及なり。故彼等讀も字まで  
書さくしと見ゆべし。信記せるもの百分の二とい  
ふもちひある。誤あきむとすゆ。中編を於て文字  
學義等の門あきハ波木その事を思ひ及さる人  
あり。波國ハ書學文字の法科種々有る事と  
申當りて光をまがほしくあり。文字標榜とも  
いふゆゑニ也。うーとするものをたゞ一字にて  
物物の一ノ條只ちよいる。彼を板世界圖等  
といへども、記せる所、我國字を換へて譯せし

魯西亞國字

ア ヘ カ ゲ エ ゼ ツ  
 A H B I A E Y U  
 イ イ カ キ ク ケ コ ベ  
 I I C A M H O II  
 エ エ テ ウ ヌ フ ハ ヲ ヌ ナ  
 E E T U F H O U N  
 ヤ ヨ ヲ ヱ 井 子 工 ユ  
 Y O O I H E Y  
 口 口 西 子  
 K K S S  
 ヤ ヌ 西 子  
 Y U S S

<sup>テ</sup> <sup>ガ</sup> <sup>シ</sup> <sup>ベ</sup> <sup>ア</sup>  
 ね 子 ね ね ね  
<sup>1</sup> <sup>1</sup> <sup>1</sup> <sup>1</sup> <sup>1</sup>  
 ね ね ね ね ね  
<sup>カ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ヘ</sup>  
 ね ね ね ね ね ね  
<sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ハ</sup>  
 ね ね ね ね ね ね  
<sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup>  
 ね ね ね ね ね ね  
<sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ナ</sup>  
 ね ね ね ね ね ね

以上二種あるとすなり但長行草よりなる體は其内  
 は異體多し右の如し

一 和蘭書より日魯西書の文字より長短ハ期斬勿泥匣  
 と尼勒多匣との二種の文字よりなるものと云  
 り期斬勿泥匣は古くテロレヤの銘裡知生セ一圓ニ  
 尼勒多匣の教ハ昔より今もあつて魯西書人なるもの  
 すゝものと云

一 佛書にアカバユイカエムオイヤルエテユウ  
 十二文字の體  
 けは是れ佛ノにまづりて用を詳せしむ格草ニ



せうしてよゝゝあきくも有難くも昇平の御代と云ひ  
まゝに張るゝにふと一きく微長くはらひを今も始りぬ  
因はる波乃るにやゝ限あるやめりてや唯遷  
延運後の罪つゝへうに全編呈上の日久右のを侍ら  
まゝとせ給はん事を希ふる也

文化四歳丁卯初夏

醫臣 大槻 茂實 謹識

彼國事本編に難載をへうするもの別を窮治  
せし救済あり亦長の當りてやえしとて事とも  
それとお合する法説を接編し救す其別卷二冊  
あるは是れ也の標をあれハ敬て

么家の秘笈たりしむ事を欲しとて丙寅年馬  
の尻皮に依の目狭隘の假宅消夏の間難編し  
て其種百たの侍長来あすてまゝのやゝぬ  
あきくも多きも併同編集の 命をせあり  
しす表の微志なり

目次

巻のまゝ

寛政五年癸酉石港出帆後難風を遭ひ数ヶ月漂流し甲寅六月朔日セイウケと云ふ島に漂着し刊一箇と云ふ漢字一ヶ年と向とて流寓とし記

二箇

巻のまゝ

ナール洋留中の紀并に魯西亞船の護送を以て外に月日漢を授けし中飲の月日ナール洋といふ漢字を序し数日逗留を以て月日西暦此年と

此年人のと云ふものと云ふ字をナール洋といふ漢字を序し数日逗留を以て月日西暦此年と

巻のまゝ

ナール洋留中の紀并に魯西亞船の護送を以て外に月日漢を授けし中飲の月日ナール洋といふ漢字を序し数日逗留を以て月日西暦此年と

街價居室

第何号

七箇

巻の記

飲食

第八

服飾

第七

卷の上

寺觀通教

第六

產育及赤子令名

第五

物

第四

卷の六

葬

第三

系

第二

衛廳并官名藏書政治兵卒神傳第九

刑獄

第一

錢貨

法政

第十 二圖

卷の七

尸度并里役

第九

秤量

第八

樂器

第七 六圖

氣令

第六

耕農

第五

交易

第四

醫藥

第三 二圖

物産

第拾九

数量

第廿

大俗風習

第廿一

卷の八

言辭

第廿二

天文 地理 諸國地名  
中國通稱

時令

人倫 身體

居家

動物 植物

衣服織履

飲食 生辭 二圖

各門澤所並に名物ノ解ありと記せり

卷の九

癸丑の年三月壬午よりて大入りの下ルエーツ道を通  
りて七十里の途中へ首途へ舊形ムスクウを経て新  
形府へトルフルカへ到るる途中の形并諸般諸般中  
は形見を記し和二年あり

卷の拾

国主目見とるもの記す并形下巡見の記 六圖

卷の拾一

形府諸般中の形  
は形見とる諸般 御平等記人の老田中侯爵和同傳

伯朝子人ききし海にぬきしとカナスタとみ海より  
大船をふれしと記 九回

巻の拾六

六月十六日カナスタに帆 フナレ 弟那馬示加 フナレ 諸危利西 フナレ 舟を  
泊り加那利更多く舟をふれしとみ海より海を  
経て南西墨利加洲 フナレ 伯西見の内 フナレ 工カテリシ フナレ 海に  
岸の海路及目所 フナレ 諸島に航して中洲の畔に  
あり西海よりふしと記 二回

巻の拾七

甲子辰紀に月を旬にケイサといふ フナレ 船をふしと記

いふをきしとみ海より海にぬきしとカナスタとみ海より  
歴より フナレ 西墨利加 フナレ 洲をふしとみ海より海を  
西に航し フナレ 舟をふれしとみ海より海にぬきしと  
海路 フナレ 舟をふれしとみ海より海にぬきしと  
いふ フナレ 舟の東南より フナレ 舟をふれしとみ海より海に  
ぬきしと フナレ 舟をふれしとみ海より海にぬきしと  
むし フナレ 舟をふれしとみ海より海にぬきしと 五回

巻の拾八

長崎港入舟上陸後の船方きしと記 二年二月  
舟をふれしとみ海より海にぬきしと記

巻の拾九





石を引く程もいへば合致する事と拾得の房いひ  
線に房を縄二房積出で石を引出た後のいひ送り状  
木舟の文をいへば船をもち通

一月五日石を引出た船をいへば東尾浦へ送り出た

日 五日石を引出た船をいへば東尾浦へ送り出た

とさういふ中一箇船をいへば東尾浦へ送り出た

船をいへば東尾浦へ送り出た

日 五日石を引出た船をいへば東尾浦へ送り出た

一月五日石を引出た船をいへば東尾浦へ送り出た

日 五日石を引出た船をいへば東尾浦へ送り出た

とさういふ中一箇船をいへば東尾浦へ送り出た

船をいへば東尾浦へ送り出た

日 五日石を引出た船をいへば東尾浦へ送り出た

一月五日石を引出た船をいへば東尾浦へ送り出た

日 五日石を引出た船をいへば東尾浦へ送り出た

船をいへば東尾浦へ送り出た

日 五日石を引出た船をいへば東尾浦へ送り出た

一月五日石を引出た船をいへば東尾浦へ送り出た

日 五日石を引出た船をいへば東尾浦へ送り出た

とさういふ中一箇船をいへば東尾浦へ送り出た

る海軍一海軍を用

一 日十二日 日風 雨 通し 船積込の海軍は雨に降られしを  
海軍は雨の降るに船積込の海軍は雨に降られしを

一 日十二日 日風 雨 通し 船積込の海軍は雨に降られしを  
船積込の海軍は雨に降られしを

一 二月 日 中 南 風 雨 通し 船積込の海軍は雨に降られしを  
船積込の海軍は雨に降られしを

一 二月 日 中 南 風 雨 通し 船積込の海軍は雨に降られしを  
船積込の海軍は雨に降られしを

一 日 十二日 日風 雨 通し 船積込の海軍は雨に降られしを  
船積込の海軍は雨に降られしを

地方通しとちりて

一 日 十二日 日風 雨 通し 船積込の海軍は雨に降られしを  
船積込の海軍は雨に降られしを

一 日 十二日 日風 雨 通し 船積込の海軍は雨に降られしを  
船積込の海軍は雨に降られしを

一 日 十二日 日風 雨 通し 船積込の海軍は雨に降られしを  
船積込の海軍は雨に降られしを

一 日 十二日 日風 雨 通し 船積込の海軍は雨に降られしを  
船積込の海軍は雨に降られしを



[illegible][illegible]









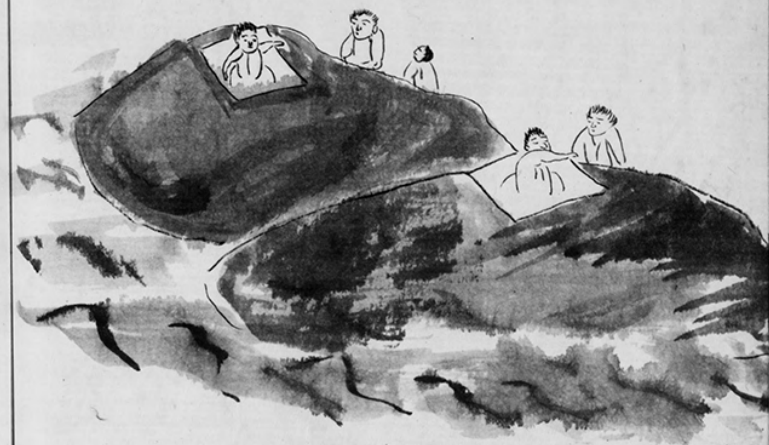






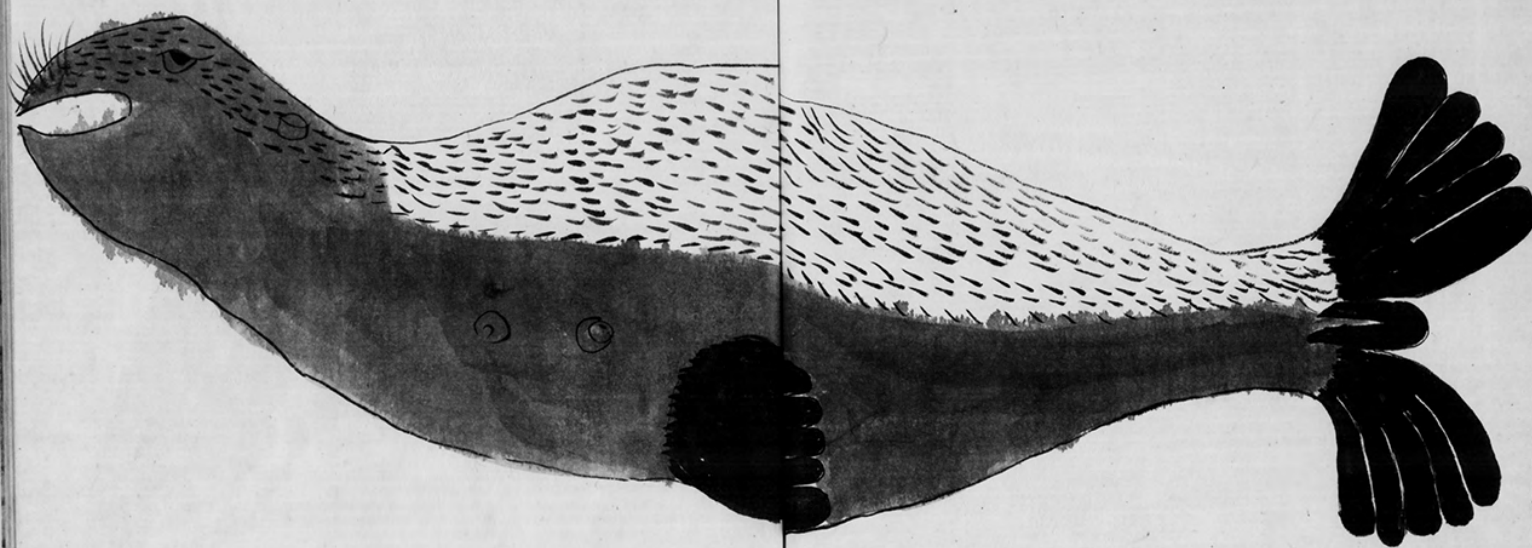


オニテレイツケ島  
穴居并島人主  
室く出へ之圖



ユーザキ圖

ユシハコナイカ  
 あんーナイカ  
 いまの世海をいづ  
 そものうし 海海の  
 海海をいづ  
 いまの世海をいづ  
 あんーナイカ



オクナ島ノ圖



一 浪合の刃口には人々の身を投ぐひつきのやうな  
 中にも又あつた刃口には一羽の鳥が落ちてゐるやう  
 描いてある

一 奥の洞で居て遠くの方へは眼を凝らすやうな  
 側には眼を注ぐやうな

一 奥の洞と洞の間には一羽の鳥が通つてゐるやう  
 の

一 奥の洞の下の地には石が散つてゐるやうな  
 氷解流のやうな

一 奥の洞の奥には奥の洞があるやうな

一 如くして縫うて物敷流しその威も落るとい計を  
用意して置くに依りては穢れぬと云ふ

一 買方と賣方と

男やもに於ては、男の病は、頭上とて希薄なり。ナ  
 ーのうへは、頭の病とて希薄なり。肩の上病とて切病なり。  
 麻痺とて、病とて希薄なり。病とて希薄なり。是もナ口  
 レイヤ、病とて希薄なり。

一 名物標の如く入のコーンキの毛皮をばらめりけり

一 ナア口 在るの口口に人の子をあつて平地の上より我々僕等  
も同じく上を拉ゆをあつてちを掛て度々入只候と云う

[illegible]

一 多くの犠牲を以て海軍の上より足場の飛竜の軍の如く  
 うち中を穴を打ちける人のあつては一人あつた中より

[illegible][illegible]





